

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4370500540		
法人名	特定非営利活動法人NPOみなまた		
事業所名	グループホームふれあいの家		
所在地	熊本県水俣市月浦213番地1		
自己評価作成日	令和元年12月1日	評価結果市町村受理日	令和2年1月23日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」		
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺6丁目41—5		
訪問調査日	令和1年12月24日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

介護保険制度が始まる前、民家改修型施設に5名の入居者でスタートした、21年の歴史を持つグループホームです。その後NPO法人を立ち上げ、現在は3つのグループホームが地域ごとに運営されています。2007年に定員9名のグループホームとして当地に新築移転しました。畑や住宅地に囲まれ、静かで日当たりのよい環境です。敷地内には広い畑もあり、地域に開放し耕作してもらっています。入居者もおやつタイムに誘われたりと自然に地域住民との交流が広がっています。又地域の公民館で開催される介護予防事業のレクリエーションに毎週数名の入居者が参加しており、顔なじみの関係ができています。屋内は重度になっても対応できるように全てバリアフリーになっています。入居者1人ひとりのペースに合わせ、さりげなく見守るケアを職員一同心がけています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

水俣病の発症した地で暮らしている人々が、「高齢になっても地域の中の一員として家庭的なやすらぎのある暮らしが続けられるように」とのホーム開設時の思いを大切に運営されている。「地域の組」に入り、回覧板を回したり、住民の通夜を手伝ったり、祭りを主催して住民との交流を深めるなど、地域に溶け込んだ存在となるように取り組んでいる。市や包括支援センター等、行政との協力体制も構築されている。ホーム前の畑では、水俣市の介護予防政策「もやい・ふれあい菜園事業」で白菜・玉ねぎ等の野菜が育てられており、地域の人々との交流の場となっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「人権・安心・共生」を基本理念とし、日々のケアで職員はその理念を共有している。法人内研修で毎年設立の経過、意義、理念の研修があり、又施設内でも年度初めのミーティングで全職員で話し合っている。	一人ひとりのペースを大切にし、その人らしい生き方で安心して居心地の良い暮らしが送れるようサポートすることを、職員の共通認識として実践している。法人内研修やホーム内研修、新入職員オリエンテーション等において、理念の周知が図られている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	「地域の組」に入り回覧板を回したりと日常的に交流がある。毎年春に当ホーム主催の「たて道祭り」を開催し、地域住民約30名のボランティアの協力のもと子供たちを含め100名ほどの参加で交流を深めている。	地域の一軒家として区費を払い、回覧板を回し、公役の清掃活動や、組内の仏事の手伝いに出向くなど、地域との関わりを大切にしている。介護予防教室の「地域リビング」では、入居者と一緒に参加して、ホーム職員はレクリエーション等を担当し、交流を深めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方々を十数名クリスマス会に招待して、ホームの様子を実際に見てもらい理解を深めてもらっている。又「地域サポートセンター」としての役割も相談に乗ったりと日常的に担っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	年6回民生委員、区長、行政、入居者、地域住民等に参加してもらい、入居者の状況や活動、地域で困っている人の情報などを報告し、話し合っている。	運営推進会議は、ホームと地域の交流促進の場と捉え、困難な事例に対してのアドバイスを受けたり、課題項目は検討され、サービス向上に活かされている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	地域密着型サービス部会や地域ケア会議、運営推進会議等を通して、意見交換・情報提供をしている。又定期的に市の相談員が来訪し、直接入居者から話を聴く機会もありその情報をケアに生かしている。	運営推進会議・地域ケア会議・地域密着型サービス部会等で、市や包括支援センターとの連携が行われている。家族支援が困難な事例に関しては、市・包括・警察等の連携が行えるように、日頃から協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	「身体拘束等適正化委員会」を法人内で設置しており、運営推進会議、理事会、法人内管理者会議等で毎回意見交換を行っている。又毎年法人内研修で全職員が身体拘束廃止の研修を受けている。	職員は、入居者の言動・行動を知ることによって、得た支援となるよう心掛けている。身体拘束等適正化委員会を設置し、年2回の職員研修会や新任職員のオリエンテーション等で、身体拘束禁止の意識の周知徹底を図っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人内、職場内研修で虐待防止の研修を全職員が受けている。家族による虐待をどう防ぐか、行政とのケア会議、ミーティング等を積み重ね一定程度成果が上がった事例もある。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人内研修で全職員が学んでいる。社会福祉協議会の権利擁護事業を利用している人もいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居者や家族との信頼関係を第一に置いている。入居時はもちろん入居後も家族との個別面談など折に触れて説明し、不安や疑問に答えるように努めている。重度化や終末期の指針についても説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	遠方の家族が多く、来訪された時に意見要望を直接聞いているが、電話やメールも活用している。内容はその都度管理日誌に記録し対応に当たっている。ご意見箱も玄関に設置している。	入居者の日頃の様子は、家族訪問時や、電話・メール等で家族に情報提供し、家族の安心につなげている。遠方に住んでいるキーパーソンが帰省した際は、入居者の状態を説明するとともに、重度化した際の意向・要望等を確認し、ケアプラン等に反映している。また、必要時は権利擁護サービスの利用等につなげている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理日誌は毎日本部にファックスで送り、報告している。職員の希望勤務時間や物品購入は一定程度管理者の判断に任されており、融通が利き離職率も低い。法人内職員集会でも直接意見を出してトイレを増設してもらった。	定期的に開催されるミーティングで、改善のための職員による提案等がなされており、内容によっては法人内管理者会議等で検討される仕組みがある。管理者は昼休み時間等にも、職員への声掛けを心掛け、将来を見据えた話・個人的な悩み等も話しやすい雰囲気大切にしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	理事会や法人内管理者会議で、管理者が職場の状況を伝え改善を検討している。特にパート職員の待遇改善に力を入れ、夜勤手当のアップ等実現した。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内管理者会議で毎年研修の年間計画を立て、新人研修、現任研修を開催している。ほぼ全職員が法人内研修を受けており、参加職員による研修発表の場も設けている。外部の研修にも積極的に参加。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者や職員は、地域密着型部会や地区ブロック会でのグループワークや交換研修等で他事業所の取り組みを学んだり交流を深めている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	まず本人の意向や家族からの要望を丁寧に聴いて全職員で話し合っている。それぞれのニーズに合ったケアの統一を図ることで初期の不安や混乱をできるだけ防ぎ信頼関係を築けるよう努力している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族やケアマネその他これまでにかかわった人たちからできるだけ情報を集め、全職員に把握させている。初期は特に本人の様子をメールや写メで家族に詳しく頻繁に伝えている。そこで家族の意向を再確認し不安の軽減に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居申し込み時に相談に乗り、グループホームの特徴(長所と短所)をよく説明する。必要と思われるときは他のサービス利用を紹介する場合もある。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家事や趣味など本人の得意なことを探し力を発揮してもらったり、昔のことをいろいろ教えてもらいながら、人生の先輩として接するように努力している。方言など特に貴重。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会のたびに家族との情報交換を密に行うよう心掛けている。又電話やメールで話し合ったり、こまめに写メを送って様子を身近に感じてもらうよう工夫している。本人と直接電話してもらうことも多い。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	これまでかかわってきた婦人会や老人会の行事、介護予防事業等に参加してもらったり、一人暮らしだった方は自宅に同行し、仏壇参りや家の風通しなど支援している。	昔の職場の知人や、近郊の施設入所中の友人など、ホームへの来訪者は多く、気軽にお茶に立ち寄れる場となっている。また、入居後に散歩で知り合った人や、新しく馴染みとなった人々との交流も生まれている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	相性を考慮し席を決めている。入居者同士の交流がスムーズにいくように職員が間に入って話題を作ったり、入居者同士でくつろげる椅子やベンチを設けている。干渉されたくない人には一人で過ごせる空間を配慮している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後もお見舞いに行ったり、亡くなられたら葬式や初盆に行ったりと、その後の付き合いを大切にしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の会話や表情、態度から意向や希望を把握したり、気付いたことは個別記録ノートに記載。ポイントはカラーペンでチェック。それを毎朝の申し送りやミーティングで検討している。	一人ひとりの言葉・つぶやき・状況・様子は、職員によって細かく観察され、個人別ノートに記録され、モニタリングの参考にしている。食事を済ませたのか不安になる入居者には、カレンダーと鉛筆を壁に下げて、入居者が自主的に印をつけて安心できるように、さりげなく環境整備を行い配慮している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	前任のケアマネや家族から情報を得、自宅を見に行ったり自宅での様子を聴いて、本人の思いや暮らし方のイメージをつかみ、毎朝の申し送りやミーティングで気付いたことを話し合っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人、家族、関係者からの情報をもとに、ケアマネが介護計画要約を作成し、毎月のモニタリング会議で見直している。一人の職員の些細な気付きを皆で話し合うことが現状把握に役立っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月のミーティングで各担当者が一人ずつ記録ノートを元に前月のモニタリングを発表し、皆で検討。ニーズの再発見に努めている。モニタリング表は健康面、生活面等に分け一目で把握できるように工夫している。	本人の思いや意見は、個別記録ノートを活用し、家族・担当者・関係者の意見を反映し、毎月モニタリングを実施し職員全体で話し合い、本人本位の現状に即した介護計画となるよう心掛けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護計画を日々のケアにすぐ反映できるように、介護計画要約を個別記録ノートに挟んで目次としている。又「一日の流れ表」「排便チェック表」「バイタルチェック表」等も活用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人の希望に応じて一緒に自宅に荷物を取りに行ったり、草取りをしたり、台風時には雨戸を閉めに行ったりと柔軟に対応。口腔ケアも日中は本人に任せ夕食後は職員が磨き直しをしたりと個別に支援している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	保育園児、ハーモニカ演奏隊、介護相談員等の訪問や、地域公民館で毎週開催される介護予防事業「地域リビング」への参加等で地域との交流を図ったり、公園に散歩に行ったりと身近な地域資源を活用。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	なじみのかかりつけ医との関係を大切にしている。定期通院などは主に職員が同行、月二回の往診の方も多い。受診の状況報告は変化時家族に連絡。大事な時は家族にも同行してもらう。	本人や家族の希望するかかりつけ医の継続を支援している。受診には看護師が同行し、医療機関との情報交換を行い、医師からの指示は看護師により他の職員に伝達され、確実に守られている。通院が困難な状態になった際は、往診・訪問診療等を利用して適切な医療を受けられるよう支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員に体調の把握、受診、薬の管理、皮膚のケアなどを主に担ってもらっている。又介護職員も経過観察での変化を伝え、相談アドバイスをもらっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には介護サマリーを提供。主治医の病状説明には家族とともに同席して情報を得、退院後の対応の仕方を共に把握できるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化・終末期ケアの対応指針を作成し当ホームで出来る事、出来ない事を入居時家族に説明している。重度化された場合は家族と主治医を交え何度も話し合いを重ねるとともに納得のいく方針を出している。ぎりぎりまでホームで過ごされた方は多い。	「重度化した場合の指針」を文書化し、医療連携体制同意書を整備している。重度化した際は家族とのコミュニケーションを密にし、家族の意向を確認しながら支援することとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署の協力を得て、救急救命法の講習を全職員が毎年受けている。急変時の学習会は職員間で定期的に行っている。夜間の急変時には応援がすぐ駆けつけられるように体制を取っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年二回消防署の指導のもと入居者とともに火災避難訓練を実施。地震、水害等の災害対策として非常用備蓄セットを玄関に常備。緊急時は近隣の特養や近隣住民との協力連携も図っている。	年2回、消防署の立ち合いのもと避難訓練が行われており、消防署から改善のためのアドバイスも得ている。各居室の入り口には反射材のタスキが備えられ、夜間避難時の入居者の安全に配慮している。玄関には、災害時の持ち出し用食料や水等が準備されている。	緊急時連絡網は作られているが、実際を想定した連絡テストは実施されておらず、実際、機能することを確認するためにもテストを行うことが望まれる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個々の入居者の好む呼び方、声掛けに努めている。自室入り口やトイレはドアとカーテンで二重にしてプライバシーが守られやすいようにしている。個人情報に配慮し、記録や職員間で話す時はイニシャルで表している。	居室の入り口はカーテンが取り付けられ、室内のプライバシー確保に配慮している。記録や入浴後のケア手順等は、個人名をイニシャルで表示しプライバシーに配慮した対応を大切にしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	会話の中でさりげなく表現される事を常にアンテナを張ってキャッチできるように全職員が努力している。服選びや外出、買い物、入浴時間など希望に応じて支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	朝の起床時間、朝食時間などそれぞれの希望に合わせて対応している。一人で過ごしたい時間も大切にしながら、他の人と交流したいときはリビングや廊下のベンチ等で楽しめるよう配慮している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	髪染めやヘアカットは得意な職員が要望に沿って対応している。朝は整容やこざっぱりした好みの服で過ごせるよう支援している。外出時はできるだけおしゃれな服装を勧めている。美顔マッサージも計画中。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は個々の好みや季節感を取り入れて作っている。下ごしらえを手伝ってもらったり、一緒におやつを作ったり、毎週立ち寄り移動販売車で好きなものを買って皆と一緒に食べたりして楽しんでいる。	ホームの畑で採れた野菜等を使って、優しい味の家庭的な食事が提供されている。年越しにはお蕎麦とお寿司、お正月には職員が心をこめて準備したおせち料理、気候が良い時にはお弁当を買って外で食べるなど、食事を楽しめるように支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量、水分摂取量は毎回チェックし、好みの味や器、声掛けの工夫で必要量をとれるように支援している。塩分制限、カロリー制限、薬との禁忌、嚥下障害等にも配慮。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	それぞれの力に応じて見守り、声掛け、一部介助等の支援で口腔ケアを行っている。歯ブラシやコップの消毒は毎週職員がしている。食前に毎回口腔体操や歌を歌っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	職員は排泄チェック表で個々の記録を取り、それを参考にして下剤の量を毎日調整している。また表情や動きなど個々のサインを見逃さず、トイレやポータブルトイレでの排泄を支援している。	一人ひとりの表情や態度から排泄サインを見逃さず、声掛けをし、トイレに誘導している。自分でトイレで排泄しようとする気持ちを大切に、職員はさりげない関わり方や見守りでプライドを傷つけないよう配慮し、支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	運動、離床、食物繊維、水分摂取を基本に便秘対策を行い、出来るだけ自然排便があるように心がけている。整腸剤、便秘薬等も主治医と相談し個々に合った与薬法、量を検討し便秘や下痢を予防している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週2、3回のパターンで入浴してもらっている。時間帯は本人の希望に合わせて、長風呂が好みの人には入浴中水分補給したりしてゆったり楽しんでもらっている。	入浴は時間帯を決めず、希望者は毎日でも入浴できるように配慮している。長風呂を好む人には途中水分補給を促し、脱水予防に努めている。また、季節によってバラ湯・柚子湯等を楽しむ支援をしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人のペースで自由に休んでもらっている。夕食後くつろげる人は眠くなるまでリビングや自室で過ごしてもらう。眠剤服用の方は希望時間に応じて与薬。室温、湿度調整、布団かけ等そっと訪室し安眠を支援。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬は職員管理。誤薬防止のため当番が翌日の薬を日付けを書いて個別に区分け。与薬前に薬を個別トレーに並べ複数の職員で確認。服用時は完全に飲み込んだか確認。薬の内容や変更、目的を全職員で学習。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	各人の力に応じてモップ掛けやテーブル拭き、調理の手伝い、洗濯物たたみ等達成感が持てる事を支援している。又レクリエーションや歌で楽しんでもらったり、競馬新聞が好きな人には買ってきて支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	買い物や散歩は本人の希望するときや天気の良い日に出かけている。庭に出て畑の野菜をもらったり、地域住民とのふれあいがある。毎週数名の方が地域の公民館での「地域リビング」に参加、顔なじみの関係ができている。	天気の良い日は近所の散歩、公民館での地域の人との交流、隣町スーパーへの買い物、ドライブの帰りに自宅近くに出かけたり、お花見に行ったりしている。しかし、普段行けないような場所、本人の希望に沿った外出等の機会は少ないように伺えた。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物を楽しめる人は店で自分で財布から支払ってもらっている。あまり外出しない人も毎週庭先まで来てくれる移動販売車で好きなものを選んだり買って楽しんでもらっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望があれば電話をかけ、家族からの電話は取り次いでいる。手紙やはがきが届いたら何度も読んでもらったり、職員が代読して外部との絆を大切にしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	明るい南向きのリビングは窓から季節の花や畑が眺められ、台所と一体化した空間でもあり食事の準備の匂いや音を感じることができる。トイレや浴室、脱衣所は広くバリアフリー対応にしている。空調にも配慮し直接風が当たらない工夫をしている。	玄関には木製のベンチを置き、履物の着脱に配慮し、廊下やトイレの明るさ、浴室や脱衣所の室温、トイレや浴室の清潔感など、細かい配慮が見られた。リビングには、梅雨・七夕・クリスマスなど、季節を表現した職員の切り絵や共同で制作した作品が飾られ、温かい雰囲気のリビングとなっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	個々人がくつろげるように気の合った人同士は一緒に、独りが落ち着く人は個別にとリビングは小テーブルを組み合わせ並べている。玄関や廊下、軒下には椅子やベンチを置き自由に過ごせる工夫をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	出来るだけ自宅から使い慣れた家具を持ってきてもらったり家族の写真を飾って寂しくないように配慮している。整理が困難な方でも自由に押し入れや洋服掛け、引き出しを扱えるよう置き場を工夫。	部屋の家具は、それぞれ向きや位置を変え、本人が使いやすいように工夫している。今まで使っていた家具や仏壇の持ち込みもあり、落ち着いた居心地の良い部屋作りをしている。エアコンを嫌う入居者には、直接、風が当たらない様な工夫をするなどの配慮がみられた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	屋内すべてバリアフリー。手すりも随所に設置。出口2ヶ所にはスロープと手すりを設けている。トイレやベッドにはコールボタンやセンサーを設置し、独りでも安全な生活が送れるよう支援している。		